

浄

monthly JODO

土

10

2018
October



貧乏骨董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

前回書いたように昭和一六(一九四一)年、國民學校令の施行により、尋常高等小學校は國民學校となっている。日中戦争(中国への侵略)の長期化と戦線の拡大は、国内の地域社会や学校教育制度へ大きな影響を与えたのである。学校においても戦時体制の強化ははかられ、「銃後の守り」「戦意の昂揚」「体力増進心身鍛練」「食糧増産」「資源回収」の実践がつよく求められることになる。同時に同年の対英米開戦はさらに戦時体制に拍車をかけることになる。

無謀な世界戦争へ突入するこの国にあって、Y・Tくんは國民學校初等科第五學年を優秀な成績で無事修業した。昭和一八(四三)年である。あと二年半で戦

争も終わる。しかしまだまだ困難な時代である。翌年には学童疎開が待っているし、アメリカ軍による本土空襲も日常化していく。伸びきった兵站線からの絶望的な退却、昭和二〇(四五)年の沖繩戦による膨大な死者、特攻という愚かな戦術、そして二個の原爆の投下まで、一億玉碎などと声高に叫ぶこの国の天皇と軍部、政治家たちは、本気で勝てる戦争だと思っていたのだろうか。そういった社会の中でY・Tくんがどのような少年時代を送ったのか、この通知表からうかがうことは難しい。

五年生ということは修了時には十一歳である。通知表に記載されている男子の平均身長は一三五・一cm、

通知表	
昭和十八年度	東京都立日野國民學校
姓名	Y・T
学年	五年
成績	優秀
健康	良好
生活	勤勉
その他	

修業證書	
姓名	Y・T
学年	五年
成績	優秀
健康	良好
生活	勤勉
その他	

左右260ミリの二つ折り、天地182ミリ。昭和14年度の通知表よりも小さくなっている。また、紙質も悪い。経済の悪化が原因だろうか。前号に「現在の第二日野小學校は、施設一体型の公立小中一貫教育を日本で最初に導入した学校らしい」と書いたが、これは間違いである。正しくは、2006年に品川区立日野第二小學校は区立日野中學校と一体化され、6・3制を廃止し、9カ年を4・3・2年で分ける小中一貫校となった。2016年には品川区立日野学園として新設された。

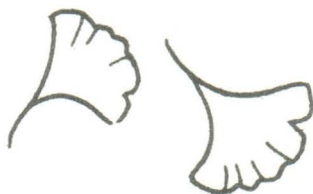
体重は二九・八kgだが、Y・Tくんは二二・二cm、二二・八kgと小柄である。それでも体操は良の上であるし、武道も一學期が良の上、二學期、三學期は優である。おそらく小柄ながら活発な少年だったのだろう。

この時期の子ども達がどのような生活を送っていたのか、本当のところはわたしにはわからない。ただおかしな縁から手に入れた通知表の持ち主であるY・Tくんが、戦中戦後の厳しい社会を無事生き延びてくれたらと願うのである。敗戦の昭和二〇(四五)年、Y・Tくんは十三歳である。Y・Tくんは戦後の思春期を、どのように送ったのだろう。

浄土

2018/10月号 目次

十夜縁起の教	藤井實應	2
連載 響流十方	小村正孝	10
連載 江戸の川を歩く②4	森 清鑑	14
仏教コラム	佐々木美冬	20
連載小説 渡辺海旭⑨1	前田和男	22
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
表紙写真＝鬼海弘雄
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

浄土アーカイヴ 一九五七年九・十月合併號

十夜縁起 の教 おしえ

藤井實應

みのりの秋、田園は黄金の波をうち、山野は紅に美しくいろどられ、鳴く虫の音もしげく、やや肌寒い風に身もひきしまり、読書し内省するの好季節、十月から十一月へかけて、毎年、浄土宗にては十夜法要が行われます。

「十夜念仏」或は「十夜講」ともいい、くわしくは「十日十夜法要」で、昔は十日十夜の別時念仏の法要をつとめたものですが、いまは、或は三日、或は一日に縮めて行われています。本来は旧暦の十月六日にはじまり十五日の満月の夜に終わるように行われたのであります。

この法要は阿弥陀仏が一切衆生を救わんとする大慈悲の本願が成し遂げられ、われわれが南無阿弥陀仏申して助かることが完成されて、阿弥陀仏が阿弥陀仏と申す仏になりましたもうたことを記念し、十月の円かな月の光を仰いで、その広大慈恩を偲び、感謝をささげる法要であります。

十夜とてかしこき法の教かな 也有

極楽はいつも月夜に十夜かな 浪化

もろもろの愚者も月さす十夜かな 一茶



いまから約五百年前、後花園天皇の永享年中（永享元年は西暦一四二九）
將軍足利義教の執権職、伊勢守平貞経いせのかみたいらのさだつねの子に兵衛頭貞国という人がおりました

た。はやくから仏法に帰依し法名を真蓮と申しておりましたが、感ずるところあって、京都の真如堂に詣でて、三昼夜の別時念仏を勤めました。その満夜の明け方に剃髪出家しようと思い定めて仮寝をし、時も五更（午前四時）になろうとする頃、夢に一高僧が現れて、貞国に告げられる用には「汝はまごころを以って、この世及後の世を我に頼めり。その心偽りなきによって、来世は必ず浄土に生まれしめよう。この世のことについては今、三日間待つように」とのことでありました。夢かうつつか、夢にしてはあまりにもはっきりした夢、これはまさしく靈夢、如来よりのお告げであると感涙にむせんだ貞国は、そのお告げのままに随って、剃髪出家を思いとどめておきますと、その翌日、公事として父貞経は隠居して貞国に家督を相続せしめられることになり、貞国は將軍執事職につくことになったのであります。

これまったく靈夢の然からしむるところと喜んだのであります。このことがはしなくも天皇の御耳に達し、非常に随喜せられまして、三日三夜の念仏に継いで、七日七夜の念仏を真如堂で修せられることになりました。その勤行の式は、慈覚大師が中国より我が国に伝えられた引声いんせいの誦經念仏でありました。これが我が国お十夜の起源と申すべきものであります。



このお話によってもよく分るように、念仏は只今より未来永遠のお救いで

あります。念仏は、身も心も生活もすべてを阿弥陀仏にささげつかえる道で
あります。念仏申すものは直ちに如来の光明に摂取せられて、そのみ光に守
られ、育てられ、明るい生活がなされるのであります。

『無量寿経』に「その光に遇うものは、三垢消滅し、身意柔軟に、歓喜踊躍
して善心生ず」とあります。斯の光というのは、いうまでもなく阿弥陀仏の
光明であります。

念仏申すものは阿弥陀仏の光明の中に摂めとられ、この光に遇うが故に、
三垢とて、よくふかの心、はらだちの心、おろかな心の三つの垢が消滅し、
身も意もやわらかとなり、よろこびにみたされて、善い心が生まれてくる
いうのであります。斯の光は無量、無辺といわれ、全宇宙にみちみちており
ます。ただ、われわれの心の眼が盲^めいているから、その光の中にありながら
分らぬのであります。

我が身と心とのすべてをささげて南無阿弥陀仏と仏を念ずれば、その光に
あうをえて、光の中に明るい日ぐらしがひらかれてゆくのであります。

貞国はまごころこめて三日三夜の念仏を修し、如来の光明裡に一つの霊夢
を感じたのでありますが、誰でも念仏すれば霊夢を感じるといわけではな
く、また霊夢に限ったことではないのでありまして、南無阿弥陀仏となります
ときには己は空しうなり「我」が捨てられて、物事が正しく見えるようにな
り、おのずから如来のお導きにあずかることができるのであります。

「我」がある時は物事をゆがんで見えますから、まちがいが多く、これが因と

なって、いろいろの苦しみ悩みも生じてまいります。念仏申すものは如来の光明に照らされて「無我」に化育そだてられますから、自ずから明おのる生活に導かれるのであります。

貞国は如来の光明の御導きにより、執権職につくことになり、この職務こそ如来より与えられし命おほいであると思命につとめたのであります。

ただ、ここで心に留めねばならぬのは、貞国ははじめ剃髪出家しようと願ったのですが、別時念仏を修したその結果、出家を思いとどまり、家督を相続することになりました。それは念仏してすべてを阿弥陀如来にまかせ、如来の御導きのままに随ったのでありまして、はじめ願っていたことと与えられたこととは違うのです。求めたものと与えられたこととは違っても、それはただみ心に随ったのであります。自分の願い求めていたものがかなえられない場合も、これが如来よりのめぐみであつたとうけとるのであります。執権職という榮譽ある職につけたのであるから、現世の御利益があつたのだということではなく、たとえ執権職でなくて他の低い職に従うことになつたとしても、それは如来よりの教命とうけとつて、よろこんでやっていく信の態度に学ばねばならないと思うのであります。

われわれお互いの日々為すべき業務しごとというものはこれ如来より与えたまへる命とうけてよろこびいさんで、そのつとめを果たしてゆくべきであります。かくて念仏申すものは如来光明の摂化おそだてによつて明るい生活にならせていただけるのであります。

お互いにわれわれの生活においては、こうもありたい、ああもありたいといろいろ願うのでありますが、それが思うようになえられるかどうか、それは分りません。その願い求めの中には利己的な身勝手なものもあるうし、あるいは純な動機によるものもあるうが、それらの願いがかなえられないのはどういうわけでしょうか。「このように熱心をお願いしているのに、少しも思うようにならぬ。神も仏もあるものか」という人もでています。

しかし、これは信なき人のことです。阿弥陀仏にまかせ仕えるものには、たとえ願いと反対の事情に出会うとも、これは自分のはかり知ることのできぬ絶対なる如来のみむねであつたと益々研^みぎ改め進むことになるのであります。

ですから念仏者は、念仏の中に、よいと思つたことはなせよとの如来の教命であるとサツと実行する。まちがつていたと気づけば改めよとの如来の教命であると念仏の中に懺悔し早速改めて進んでゆくのであります。



さて、この貞国の真如堂における、三日三夜の別時念仏がもとになり、更に七日七夜の引声念仏が行われましてから約六十年の後、後土御門^{ごつちみかど}の御宇、明応四年（一四九五）三月、浄土宗の鎌倉蓮華寺の長蓮社観誓祐崇上人は、勅命によって、内殿において、阿弥陀経を講じ、かつ真如堂の僧を集めて、

觀誓上人が導師となり、引声の弥陀念仏を修しました。

天皇は非常に感激せられて觀誓上人に「何なりと願いのことがあったら申しでられよ」と仰せになりました。觀誓上人は「このたび、殿中において修しましたところの引声弥陀念仏は、慈覺大師の請来せられて日本に弘通いたしましたもので、殊に真如堂の靈驗から事が起つて、十月に十夜の法要を修行せられました。是れ偏に念仏は諸經が無くなった後も特に留めるとの釈尊の仰せあらたなる謂れであります。この引声の誦經念仏及び十夜法要を、この私も民間にも移させていただき、浄土の勤行に備えたいと存じますから、どうか私どもの寺においても、十夜法要をいとなむことをお許し願いたいと存じます」と申し上げました。この事は謂わるままに、快く勅許になりましたので、それから浄土宗の寺院に十夜法要を修することになったのであります。

これは鎌倉光明寺第九世源誓上人のお書きになった『十月十夜略縁起』に出ていることであります。

○

無量壽經に「此に於いて十日十夜、善を修すれば、他方諸仏の国土において、善を為すこと千歳するに勝れたり」と、ありまして、これが十夜法要の言葉の出どころであり、またこれが十夜法要に際しての心得べきみ教えであ

ります。

この世の中は「正直者は馬鹿をみる」ともいわれ、悪い事は行われやすく、善い事はなかなか行われぬ、悪人がはびこり、善人がしいたげられ、善人が損をし悪人が得をするようなことが多いのであります。それをそのままほっておいたならば、それこそみんなが滅びてしまわねばなりません。そういう世の中であればこそ、つとめて善を修さねばなりません。そういう世の中で善を修するからこそ功德大なりといわるるのであります。

お寺に詣ると蓮華が飾られ供えられています。濁りの中から出でて、濁りに染まず、美しい花を咲かす、この蓮華こそ、この住みにくい、悪の世の中に生きゆくわれわれの御手本であります。

念仏申す者は、人中の蓮華であると釈尊はおほめになりました。悪は為し易く、善は行いがたい。われわれは、ただすべてを大慈悲に在す阿弥陀あみだほとけにおまかせ申し、みほとけを念じ念じて、そのみ心を心とするように、念仏の日ぐらしをさせていただくことが大事であります、この念仏生活によつて、仏のおまもりのなかに、この世に於いて、善を修することもできるのであります。

お十夜法要の志すところもまた、この念仏生活にあります。

こうるじゅうほう
響流十方

犀^{さい}の角のようにただ独り歩め

(釈尊『スッタニパータ』)

もうしばらく、このままでするしてください

新聞で読んだ蛭子能収えびすよしかずさんのコメント（「朝日新聞」平成三十年八月二十八日朝刊）が輝いて見えた。蛭子さんといえは、ちよつとトボけたような独特のテイストを醸している漫画家だ。愛嬌のある笑顔はテレビでもよく見る。

中学時代にイジメにあつていたという辛い過去を披歴。「友達をつくるのが苦手だった」と語つたうえで「一人がいい」というのは、イジメからのネガティブなそれではなく、むしろ群れることによる弊害を心身に体験し、自身を大切にするこの重要性を実感された結果の、孤高な独りたることの尊さを言つているように思えた。それは決して暗くはなく、彼の笑顔のように、明るい。

*

「誰誰のツイッターのフォロワーが何万人突破」といった景気のいい報道がなされる一方で、SNSから脱する芸能人が少なくないとか。便利な反面、妙なしがらみに苦しむばかりか、思わぬ「炎上」に身も心も疲れた人もいるようだ。子どもの間ではそれこそイジメのツールと化していることもあり、事態は深刻。そういえば、なんということはないけれども、筆者もフェイスブックをここ数カ月見ていなかった。失礼をしていたら、ゴメンナサイ。この原稿を書き終えたら、開いてみます。

*

巷ではアンチエイジングの話題しきり。化粧品にサプリメント、体操……。最近はこちらに薬物療法も加わってきているというから、恐ろしさすら覚える。日本語訳「抗老化、抗加齢」。諸行無常の摂理に真っ向から挑むような、なんとも勇ましい言葉ではある。せめて、「老化速度鈍化対策」程度にとどめれば、折り合いつくかもしれないのに。あつ、こんなこと言うと、世の女性陣から叱られそう。「なんてアンチなヤツだ」って。

釈尊のことばを収めた初期の仏典『スッタニパータ』には、「犀の角」と呼ばれる章がある。そこには、五十八の偈頌げしゆがあり、そのほとんどの末尾が「犀の角のようにただ独り歩め」と締めくくられている。その前には、執着の対象となるあらゆるモノやコト、欲望について記される。仏道を歩む上で妨げとなるそれらから手離し生きよ、というのだ。妻子や親からさえも。

「犀」とは動物のサイだ。基本的には単独行動する生態のようだから、一頭で歩むというイメージは湧く。ひとり泰然自若として歩む頭上にそそり立つ角、

それはさらなる孤高、気高さ、尊厳といったものを象徴しているのだろう。

なかなか、その通りには生きられない。少なくとも、筆者には。やりたいこと、欲しいもの、捨てられないことがたくさんある。妻子、親を手放せと言われても、肯んじえぬ相談だ。「犀の章」の五十八文のなか、二つだけ、「犀の…」が付されないものがある。そのうちの一つ（第四十五）。

もしも、賢明で協同し行儀正しい明敏な同伴者を得たならば、あらゆる危難にうち勝ち、こころ喜び、気を落ち着かせて、かれとともに歩め。

釈尊の後、千七百年、日本の僧法然は言った。

ひとりこもり居て申されずば、同行と共行して申すべし……妻子も徒類も、自身たすけられて、念仏申さんためなり。

少し、安心した。今のままで、いいのかもしれない。無常の中で、悩みながら念仏を申し申し、お迎えをいただくそのときまで。

二十三年間にもわたり、誌面を汚してまいりました。今回で私の執筆も最後になります。読者、そして関係者の皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

（小村正孝）

江戸の川 を歩く

第二十四回

江戸ウォーカ―

森清鑑

本所・深川水路
豎川・大横川

江戸期、本所、深川一帯には、碁盤の目のように縦横に運河が張り巡らされ、人口流入にともなう都市化が進行している。

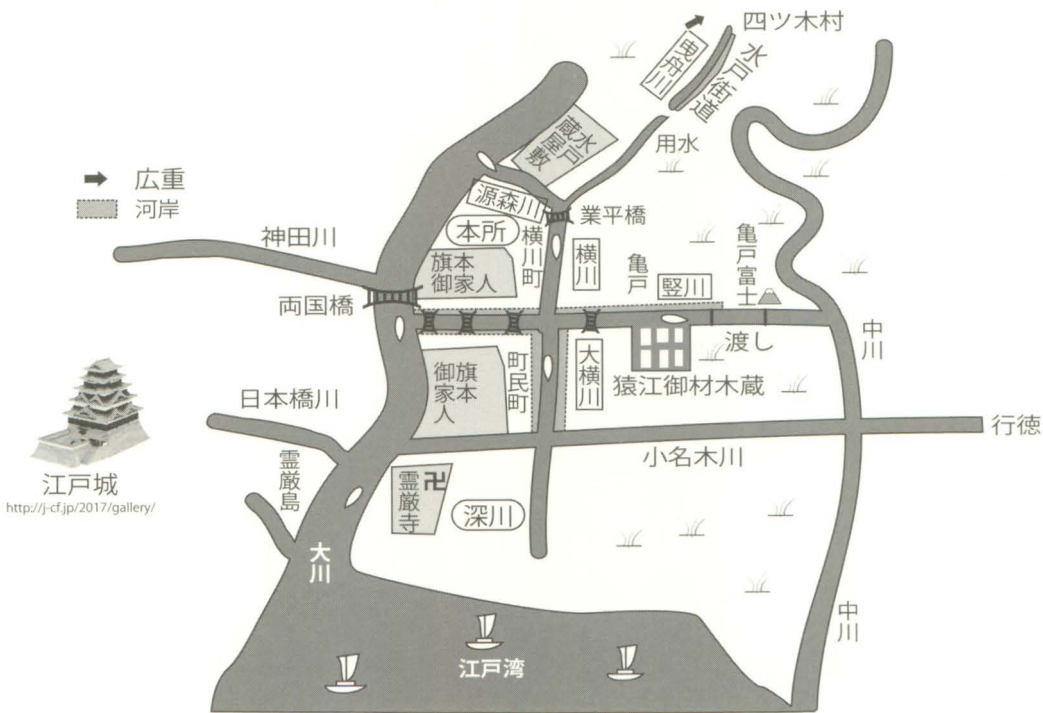
だが、一五九〇年、家康入府時には、波や洪水に洗われてゐる葦の湿地帯で、面積も江戸後期と比べると格段に小さく、人が住めるような処ではなかった。家康は、まず、江戸湾沿いに小名木川を掘削する。そのちよつと先には江戸湾の波がきている。そして行徳から塩を江戸に持ち運ぶことに成功する。小名木川の位置は変わらないのでそこまで波が来ていたと言うことである。掘った後出る大量の土は、周辺の湿地帯埋立のために再利用。人が住める土地に変えていく。しかし、川の洪水で水浸しになってしまうのでは元の木阿弥。そこで利根川本流を銚子に持つていくなど瀬替え大工

事が延々と続く。運河を掘つては、その土で埋立て整備。本所、深川はこうしてできあがつていく。さらに小名木川から先の江戸湾の浅瀬をどんどん埋立て、江戸期の深川が形成され、深川州崎十万坪まで領地を広げる。深川八郎右衛門は、家康とともに摂津（大坂）から移住。彼は恐らく漁民であつたと思われるが、家康に見込まれ、責任者として埋立て大工事に大きな業績を残す。ために、地名は、彼の名を取り、深川と呼ばれるようになる。

こうして当初は、簡素な漁村にすぎなかった深川は江戸の重要な一角となっていく。しかし、本所、深川の爆発的發展の最大の動機は、なんといっても一六五七年の明暦の大火である。江戸城まで含め江戸は灰燼と化す。人々は家を失い、本所、深川に移住。まず、町民から。そして旗本、御家人クラスの武家が。

大火で逃げて来た人々がここで立ち往生。大川に橋が一本も架かっていなかったため。そこで手始めに幕府は大川に初の大橋、両国橋を設ける。両側には広い火除け地を。両国橋は、人々の往来と物資運搬に大きな役割を果たす。正に、武蔵国と上総かずさの国を繋ぐ両国

本所・深川水路
 豎川・大横川



豎川

橋。この時点から急ピッチで縦横に堀を掘削。掘削土は土地整備へ、生活物資の運河とする。紀伊國屋文左衛門の登場。建築ラッシュ、材木運搬の拠点となす。彼が深川に住まいしていた理由はここにある。

幕府はまず一六五九年、豎川たてかわの掘削を開始する。こ

の川堀は両国橋の南から東西一線中川までの流路で長さは五キロメートル強。本所奉行の徳山五兵衛、山崎四郎左衛門が、始点の大川と終点の中川に狼煙を上げ、これを目印に東西直線の運河を開削したという。無論、掘られた大量の土は、本所地区埋立て整備に使われた。小名木川と平行に掘削しており、江戸城から見ると縦に流れているので豎川と命名。その後、物資運搬船、観光客船の数は膨大となる。

江戸湾に向かって両国橋を潜ると直ぐ左手に豎川の入り口がある。最初に目につくのが一つ目の橋（大川沿いに南北に走る本道を通す橋で人通りも激しい）で、この橋を潜ると両側は連綿と河岸（荷物の揚場）が続

く。すぐ、二つ目の橋。そして等間隔で三つ目の橋。すると南北に流れる大横川にぶつかる。ここまで両岸とも河岸が続き、河岸の背後に町人町、さらに旗本・御家人の住宅が密集している。さらに直進。四つ目の橋。人口はぐっと少なくなるが、川の両側は町人町。まだらに武家屋敷。亀戸村の田畑が目につくようになる。そして橋の右側には、五万五千坪に及ぶ、猿江御材木蔵が展開される。きっちり仕切られた巨大な人工池におびただしい数の材木が浮かんでいる。これを過ぎると、亀戸村、小梅村などの田圃風景。五つ目からは橋は無く、両岸の繋ぎは、舟による渡し場。さらに進むと六つ目の渡し場があり、左を見ると浅間社の亀戸富士が田圃の中に聳えている。そして大河、中川に出る。対岸を見ると西小松川村の広々とした田が広がっている。ここまでが豎川。広大な材木蔵に象徴されるように材木筏が中川経由で豎川に入り、当初、材木運搬路として栄え、次第に成田や鹿島詣での旅客で賑わうようになった。

大横川、源森川、曳舟川

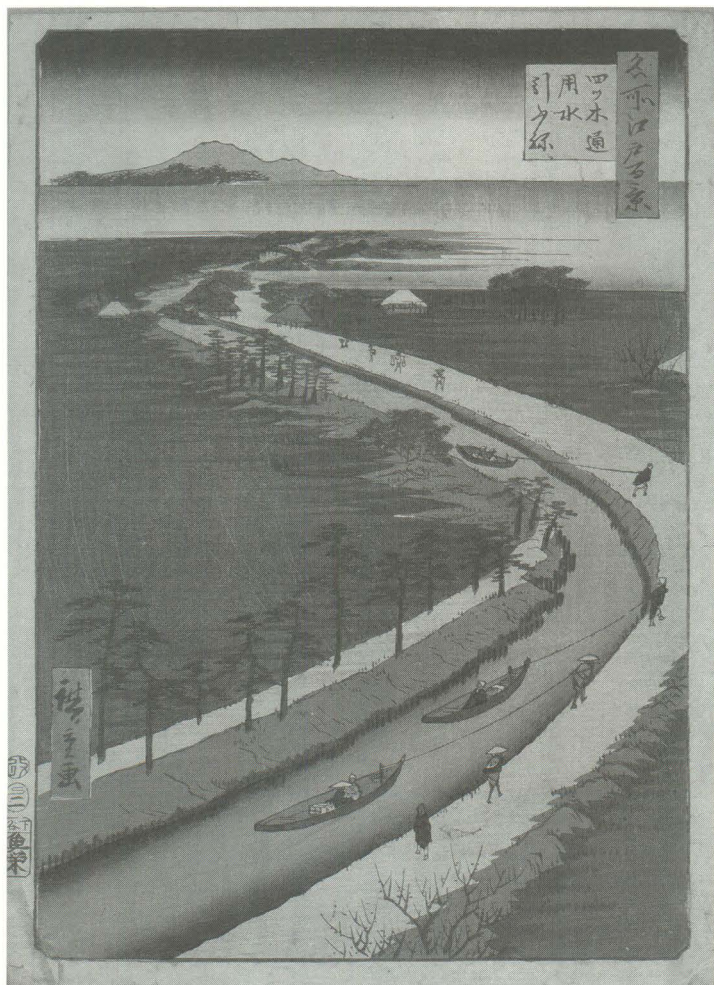
大川沿いにある、水戸中納言蔵屋敷の南沿いを走る川が源森川。距離は、短く、材木の引き入れに掘削された。水戸屋敷が終わると右に急展開、南に一直線。その角に業平橋がある。そして、その曲がり角から東北方向一直線、水戸街道沿いに流れる細い川がある。これが曳舟川で先行き、四ツ木村を通る、四ツ木通用水。もとは深川方面への飲料用水路であった。この用水が禁止されてもっぱら柴又の帝釈天詣での参詣客を舟で運ぶ通路に利用されるようになる。広重は、四ツ木村辺りの光景を描く。題して、「四ツ木通用水引き舟」。曳舟。なんと船頭は舟にくくりつけた綱を曳いて水戸街道を歩いているのである。用水の流れは早いので艀を漕ぐには不向き。そこで考え出された曳き舟である。常時、十四艘の舟が往復していたという。客

はお金持ち。引き手は近くの農民。副業で女も曳いたという。

曲がり角に戻る。業平橋を潜って真っ直ぐ南下。ここから川名は横川となる。豎川に対して横川と命名。右を見ると町人町、左を見ると小梅村の田に混じって大名の抱え屋敷や寺が点在。北割り下水を通過すると法恩寺橋。右側町人の家宅に続いて旗本、御家人の家宅が密集。左側も旗本御家人屋敷が多くなる。すると東西に流れる南割り下水。通過。長崎橋。川名も大横川となる。左右、町人、武家屋敷とも正に密集。当然、両側とも河岸（荷揚場）が連なるようになる。右側、時の鐘を通過すると東西に流れる豎川に到達。南辻橋を潜ってそのまま南下。右、本所菊川町と武家屋敷密集。遠山金四郎の抱え屋敷も見える。菊川橋を潜ってさらに南下。程なく小名木川に到達。

この大横川の掘削も豎川と同時に開始される。一六五九年。工事責任者も徳山、山崎の両名。掘削した土は、埋立てや整地に使われている。それから約四十年後に小名木川から海に向かって南へと掘削される。家宅が密集してくれば、生活物資の供給量も増える。往

時、荷足船百八十五艘を始め肥船、漁船など多種多様な舟が数百隻、利用する幹線水路となった。



広重：「四ッ木通用水引き舟」：船頭は綱を引いて水戸街道を歩く。
田園、点在する農家と前方に筑波山が描かれている。

仏教 コラム

佐々木美冬

伝道とは文字通り「道を伝える」ことなのであると思う。この言葉、英語のミッションの和訳にあてられたため、トム・クルーズの『ミッション・インポッシブル』シリーズがまず頭に浮かび、スパイ大作戦のようなものとごっちゃになってしまいが、本来はキリスト教、特にプロテスタントにおいて「使命」の意味合いで用いられるものである。カソリックでは伝道というより、布教あるいは宣教という言葉が使われるようだ。

仏教においても広く教化のひとつとして、さまざまな方法で実践されている。文書やカレンダーを配布したり、ポスターを貼るなどもそのひとつ。さまざまな

場所での法話、講話というもの然り。通夜葬儀の読経然り。ここまで入れると、即ち僧侶の存在自体が、布教であり、伝道であるともいえる。

門前に掲示板がある寺院をよく見かける。それぞれいろいろ工夫がなされているのが分って見比べてみるのが楽しい。墨痕鮮やかに書かれた経典の成句、法語、教訓。あるいはイヴェント告知、宗派配布の美しい多色刷りポスター。

掲示伝道というと、なにやらものものしいが、寺院の顔つきのようなものであるともいえる。写真は季節ごとに俳句が書かれている掲示板である。

「折り鶴の腹ふくらまず無月かな」聞けば、寺に書道部、囲碁部、俳句部等があり、書道と俳句の両部在籍の女性部員の自句自筆であるという。これは九月の句。十月は別の女性部員の句で、これも自句自筆でもう用意されているというものを見せて貰った。「宇宙から秋刀魚の群れは見えますか」とあった。どうもこれは伝道とはいいにくい。まあ白居易いうところの「林間に酒を煖めて紅葉を焚く」の類ではあるだろう。



小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第九十一回

第三部

充実と稔りの白秋へ

大逆事件と創作寓話



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校（現芝中・高校）、同本校（現・大正大）へ進学を許され、明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として仏教再生の興望を担い、印度学の拠点ドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍らキリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、バーゼル万国宗教歴史学会で研究発表、仏教に造詣が深いオーストリアハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ伯と出会う。また、ヨーロッパ初の比丘ニャーナティ口カ存在を知らされ強い興味を覚える。一方盟友・萩原雲来が博士号を取得して帰国、残された海旭は母トナと導きの師・端山海定逝去の悲報に耐えながら博士号を取得するも宗門から給付金を打ち切られる。東大教授・姉崎正治の仲介で富豪カーンに援助を求めるが断られ万策尽きたところへ、ドイツ駐節日本大使の珍田捨己から援助の手が差し伸べられ、海旭は悩んだ末に相思のドイツ女性の勧めを受け入れ、シベリア鉄道で帰国の途へ。途次奉天で新仏教運動で知り合った滿蒙の外交官・北条大洋と再会、大アジア主義に共感を覚える。そして、いよいよ十一年ぶりに祖国の土を踏むと、大事件が待ち受けていた。世に言う「大逆事件」である。

盟友・高島米峰の来訪

わが渡辺海旭は俠客坊主であるいつぼうでリアリストである。それは幼少期から働きに出された生い立ちとも関係しているかもしれない。御託を並べていても生きてはゆけぬ。時代にはどうにもならない「流れ」がある。いくら正しいことを叫んでも、それを逆転させることが叶わぬ時がある。だったら「時代の流れ」に乗りながら、「でき得る最大限」をめざす。海旭にとって、近代化に大きく舵をきった日本の社会の「現実」にあわせて仏教を生かすことが、それであった。

しかし、その方法とは何か？ なかなか思いつかばす、悩んでいるところへ、盟友の高島米峰が、海旭が居を構える自坊深川は西光寺を訪ねてきた。

高島が境内に入ると、本堂から聞きなれた朗々たる読経の音がする。早朝の勤行ならともかく、帰国早々、昼日中に読経とはと奇異

に感じながら、玄関で案内を乞うと、やがて読経がやみ、海旭本人が姿をみせた。

「おぬし、いつたいその格好はどうしたのだ」

これが高島の発した第一声だった。驚くのもむりはない。高島が想像していたのは、在独時代に手紙に添えて送って寄こした写真そのままに、髪はオールバックできつちりときめ、フロックコートをりゅうと着込み、襟元には蝶ネクタイが華やかに結ばれている「洋行帰りのハイカラ紳士」だったからだ。ところが目の前にいる旧友は頭を丸めて法服姿の地味このうえない「ご住職さま」であった。

さらに、高島を驚かせたのは、お茶をすすりながら、久闊を叙しはじめたときの入り口の話題だった。高島は、十余年前、海旭に餞別を断わられた件をもちだした。

「新仏教同志会一同から、留学するおぬしに餞別にと十円を渡そうとしたら、おぬしは、これは同志会の運動につかってくれとき返したが、その理由がふるっていた。おぼえて

いるか」海旭が頷くのをはたしかめて高島はつづけた。「僕は生涯結婚しないから、生活は簡単にいく、したがって金はいらぬと。そのときはそんなものかと納得した僕だったが、おぬしの留学中に嫁をもらって、結婚は大いに活動に役立つと知った。どうだ、結婚をしてみたら」

すると海旭は、「け、結婚はしないとの決意をますます強くしている」と、とりつくしもないので、高島は、それが真意であると感じ取って驚いた。

なにやら、古色然たる戒律僧に先祖がえりしようだった。姿勢格好もそうだし、不犯をつらぬこうとする作風も、十一年前の出発前よりも、古めかしい僧侶然としている。「新知識」にはそれに似つかわしい格好と作風というものがある。いったい世界の文明の中心であるヨーロッパへの留学はなんだったのか。留学後の海旭を仏教革新運動の旗手として期待していただに、高島の戸惑いは大き

かった。

高島は訊いた。「おぬしは、いったい、十余年の留学の成果をどう生かすつもりだ。まさか、法然さんの時代の戒律坊主にもどれというのではないだろうな」

海旭は答えた。「い、今浦島としては、こ、こうして念仏三昧をしながら、そ、それをじつくりと考えているところだ」

「相変わらず吃音だけは治っていないようだ。これでそれが治っていたらもう別人だ」と高島は言った。「そうだ、われらが新仏教同志会の機関紙に、おぬしの今後の抱負を書いてみないか。おぬしも同人なんだから」

新仏教同志会機関紙への寄稿

今後の身の振り方を考えているということに嘘偽りはなかった。海旭は高島の申し出をありがたく受けることにした。自分の来し方をふんまえて行く末を考えるには、文章にするのが効果的であることを海旭は体験的に

知っていた。ただ考えているだけでは想念があちこちに飛んでまともならない。しかし、とりあえず筆をとり文に起こしていくと、やがて焦点が定まり像をむすぶ。しかし問題はどんな「手法」によるかだ。論文か、漢詩か、漢文か。まさか俳句や和歌ではなからう。しばし悩んで、寓話にすることにした。寓話というのは隠喩を盛り込みやすい。まさに人生の節目を画する思索なのだから、手法も新しいものに挑戦してみようと思ったのである。

しかし、想像した以上の難行となった。挑戦してみても寓話の奥深さを知り、あたためて、かつて海旭が小僧をしていた博文館から童話作家としてデビューして大活躍している巖谷小波の才能を思った。さらにいうと、寓話という形式の難しさもあるが、想がまとまりかけたところに大逆事件が起きて、海旭の周囲にざわめきが生じたことも影響して、自分の行く末がなかなか見定まらなかったことが大きかった。

再三にわたる締め切り破りに、業を煮やし堪忍袋の緒が切れた高島米峰編集長から、「違約は悪事なり。もう原稿はいらぬ」という宣戦の布告のはがきをもらったところで、ぎりぎり出来上がり、ようやく『新仏教』（十一卷十号、明治四十三年十月）に掲載されたのが、創作童話「釣龍爺」である。それでは、これに海旭がどのような人生の青図を仮託したのか、推理を働かせながら読んでいたかどうか。（なお、旧かな使いは新かな使いに、旧字は新字に改めた）

創作童話「釣龍爺」

阮五爺は、今尚寂しく過き立てる龍淵に、空しく^{（空しく）}綸を垂れて居る。

老爺には嘗て^{（かつ）}広大なる邸宅^{（やしき）}があった。鉅万^{（きよまん）}の資産も所有した。小さけれど一郡の郡守で、有力な相識^{（しりあひ）}や友人も少くはなかった。若くて美わしき妻、活潑で^{（れいり）}伶俐な兒女が、一度は此老人を幸福にした。晴々しい^{（かんも）}歎喜の時代もあった。

た。

然し今老爺は其資産の殆ど^{（たゞ）}渾てを蕩尽した。倉庫に溢る^{（ぼち）}計であつた珠玉や珍器は悉く人手に渡つて居る。地位は勿論失した上に、友人とも悉く絶交して仕舞つた。其果は妻とも離別し、兒女まで皆振り棄てて、独り寂しき龍淵に、釣竿を手にして、毎日立つて居る。

実に老爺は此龍淵のために、一切を犠牲に供したのである。彼は其財産を名譽も地位も家庭も、渾て此龍淵の底深く潜める龍を釣り上げんが為に、淵中に投げ入れて^{（しま）}了つたのだ。

彼は龍を釣り上げる目的の為に、ありとあらゆる難行苦行を修し、努力と云う努力を尽した。印度から来たある行者に縛龍の秘呪を授かりて、大雲請雨教を^{（まじ）}鏤刻した、銅の釣竿を作つた。華山の仙人から騎龍の術を得て、千人の少女の髪を編んだり、白虎の筋を練つたりして、綸^{（つと）}を製した。香餌^{（かき）}のためには辛苦して鵬^{（もく）}や鷺の肝を集めたり、熊の掌を取つたりした。尚其上に彼は釣り上げた龍を納める

瑠璃の秘密瓶まで準備した。

かくて老爺は唯龍を釣り上げた後の愉快の
みを想像して、其日を送った。彼は龍を御し
て、天下を飛行する壮快を夢みた。彼は龍の
化けた乙女の給仕を受ける快楽に其胸を躍ら
せた。彼は龍刀の威力の莫大なるを信じて、
之を揮^{ふる}って一躍天下の大將軍となるの暁を楽
しんだ。彼は龍書を一読すれば直に一切智者
となつて、全智全能の働が出来るのが甚だ遠
からぬに雀躍した。而して春、而して秋、晴
れても降つても、雪が降ろうが嵐が暴れ様が、
夜がな日がな、何時でも龍淵に来て釣をした。
此の如くして三十年元氣の年少郡守は今白
髮垂死の老人となつた。

精神一到事皆成りて、老爺は終に一生の目
的を達した。彼はある夜見事に淵底の金龍を、
魔釣に懸けた。歎喜と成功で夢の様になつて
彼は金龍を秘密瓶に納め^{しま}了つた。風雨晦冥^{かみめい}、
天地も滅びん計の大雷雨の夜だつた。

彼は今努力と修行の苦力で、自在に龍を制

御して、彼が常に憧れて居た楊州や長安など
は勿論、ある時は、雪山の阿耨達池^{あのだつち}で浴をし
たり、北俱盧州^{はくろしやう}で晚餐を喰つたりした。世間
の快楽は彼の思うがままだった。然しかくの
如くに自由に龍を駆使する、大自在の飛行家
は、また其実、龍に使役されて、其絶対の制
御を受けねばならぬ運命となつた。

龍はよく老爺の命令に服従する。然し老爺
も亦一から十まで龍の要求に応じなければな
らなかつた。龍は時に少女の生血を飲みたい
と要求する。百匹の狐を直に出せという。三
日の間閉目して物を見てはならぬという。か
くて老爺は到底之に堪えられなくなつた。

阮五老爺は遂に金龍を龍淵に放ち歸した。

龍淵は今尚青く濁つて、山には寂しく名も
知れぬ鳥が啼いて居る。

海旭の寓意は何か？

さて、いかがだったろうか。読者諸賢は海
旭の寓意をどう読み取られたらうか。

いずれにせよ、この創作童話には、海旭の帰国後の想いと身の処し方が仮託されていることは間違いないだろう。最初の読者である高島米峰も、当然そう読んで、海旭にたたみかけるように、問いただした。

「おい、渡辺、おぬしの言わんとするところはなんだ。老爺はおぬしのことだろう。そもそも金龍とはなんだ。おぬしが手に入れて、手なづけたと思った金龍とはなんだ。しかし、じきにそれは逆であったことを思い知らされた金龍とはなんだ。ひょっとして宗門か。それとも……」

海旭は黙したまま静かに笑うばかりだった。おそらく海旭自身にも答えようがなかったのかもしれない。実は難行したくだりというくだりは、気がつくと、海旭の意思や企図を超えて筆が勝手にうごいてできあがっていたというのが正直なところだった。

目をとじたまま海旭は思案した。

「金龍」とは自分にとってなにか？ たしか

に留学生活は金龍をもとめた十余年であった。そのために、海旭はもてるすべてをそそぎこんだ。海旭本人だけではない、宗門も海旭を通じてどれほどの私財を注いだことか。金のことというのは憚られるが、留学する船中で海旭は自らの留学にかかる経費を持ち家が四軒は建つ金額とはじきだしたが、実際はそれ以上だった。金龍とは、宗門が海旭に期待したものと言い換えてもよいかもしれない。それは学問をきわめることであり、帰国後はそれを大いに宗門のために生かすことであった。

海旭は金龍を手に入れ、手なづけたと思っていた。しかし、帰国してじきにそれは逆ではないかと思うようになった。つまり金龍にいいように操られているのではないかと。

実際、帰国したら、帰国前からポストと仕事が決められており、また学究の世界においても宗教大学の教壇が用意されていた。それでもあえて「格下」の芝中学校校長を引き受

けたのは、金龍の呪縛から逃れたいという海旭の想いが働いていたからなのかもしれない。

実は、これは米峰には言えなかったが。当の米峰と一緒に活動している新仏教徒同志会も、金龍であったかもしれない。帰国したとたんに大逆事件が起き、新仏教徒同志会にかかわる僧侶も連座した。海旭は距離感をおぼえつつあった。寓話の筆がなかなかすすまなかった最大の理由はこれにあった。

海旭が留学直前につくられ海旭自身も中心メンバーである新仏教徒同志会は、幸徳秋水や堺利彦ら社会主義者たちとは「相思」の間柄にあり、その主力メンバーたちは、社会主義者たちを陰に日向に支援しつづけた。たまたま別件で獄中であつて大逆事件に連座することとをまぬがれた堺利彦が、同年九月に出獄したときには杉村楚人冠がそのころはやはり止めた自転車漕いで出迎え、またその堺を通じて、大逆事件に連座した被告たちに新仏教徒同志会の機関誌『新仏教』が差し入れられ

るなど、両者の友好と連携はつづいていた。

大逆事件によって日本の社会主義運動はしばらく「冬の時代」を耐えねばならないが、生き残りの一人としてかすかな運動の火を点しつづけた堺利彦にとっては、高島米峰や杉村楚人冠ら「新仏教徒」との交友は救いであつたにちがいない。

しかし、こうした仏教改革派の盟友の動きに対して、海旭は違和感と距離感を抱くようになっていた。どうもドイツの社会主義者たちと日本のそれとは違う、そういう思いをつのらせて、海旭はあるとき高島米峰に直言したことがあつた。

「に、日本の社会主義者は、どうも実践がともなわない。こ、こむずかしい理屈ばかりをこねまわしている。わが新仏教徒同志会にもその癖がある。だから堺たち社会主義者と気があうのだろう。しかし、彼らとつきあっていると未来はないかもしれんぞ。ドイツの社会民主党の連中は、セツルメントという貧者救

古き伝統技

三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替0018002145231

济活動をしたり、要するに実践を通じて細民大衆から支持を得ている。ところが日本の社会主義者はどうだ。たしかに政府の妄圧は問題だが、知識層相手に大層な言説ばかりをはいて、細民に支持をえることを怠ってきた。だからジリ貧なのだ」

新仏教徒同志会にひそんでいる実践をともしなわない言説至上主義への海旭なりの批判であつたが、高島に響いているようにとは思えなかつた。

超然たる理論家・言説家ではなく、実践家として社会と関わりたい。寓話「釣龍爺」にはそんな想いがこめられていたのかもしれない。しかし、はたしてどれだけの人に理解し

てもらえるであらうか。高島米峰のような盟友でさえ、海旭の直言が理解できたかどうか、心もとなかつた。

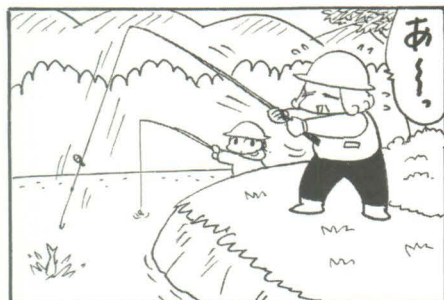
さらにいえば、いつとき金龍から自由になつたとしても、また新しい金龍があらわれ、それにしぼられるかもしれないという予感が海旭のどこかにあつた。超然たる理論家から実践家になつたとしても、その実践家が金龍となつて、それに金縛りにあうかもしれない。はたしてこの創作寓話が当たるのか、それとも外れるのか。もし当たるとしたらどう当たるのか。外れるとしたら、どう外れるのか。それは神、いや仏のみぞ知る、であつた。

(つづく)

さっちゃんねネッ

154 がい目

かまち♡ふしう



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)

念仏が楽しく聞こえる十夜かな 岱潤

九月四日の天声人語にこんな話が載っていた。池谷裕二著『脳には妙なクセがある』にこんな実験が紹介されている。箸を横にして歯でかみ、笑顔に近い表情を作る。すると脳内ではドーパミン系の神経活動に変化が出るという。ドーパミンは快楽に関係する。人は楽しいから笑うが、表情を作るから楽しくなるという逆の因果関係もあるというのだ。だから箸をかみながら漫画を読むと、よりおもしろく感じるという。そう言えば甲子園の高校野球で、ピンチになったときに皆で笑顔を作っているチームが増えたように

に思われる。それも同じことを狙ったことなのだろう。

「夜寝る前に、今日一日のよかったことを三つ思い出してから寝るようにしましょう」と、法話の時いつも話している友人がいた。出かけるのに晴れてよかった。電車を降りたら目の前にエレベーターがあつてよかった。等々何でもいいのですよと彼はいつも言っていた。あたりまえをよかったと感じる心、それがドーパミンを出させるのだろう。だからよかったことが一つもないと思っても、笑顔を作ってみると、楽しい気持ちになれたら、よかったと思えるのかもしれない。

巨大な台風に大地震、あまりにも悲しいことが多い夏だった。悲しいときはすなおに悲しむべきともいう。でも「泣く」は涙を流したら立ち上がる意味、せめて笑顔を作って行きたい。(長)

編集チーフ 編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十四巻十月号

頭価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十年九月二十日

発行 平成二十年十月一日

発行人

編集人

印刷所

株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇一一
東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七

FAX 〇三三五七八七〇三六

振替 〇一八〇・八・八二二八七

雑誌『浄土』 特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(岡国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(大本山清浄華院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。

※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。

※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。

※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ

Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または

郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

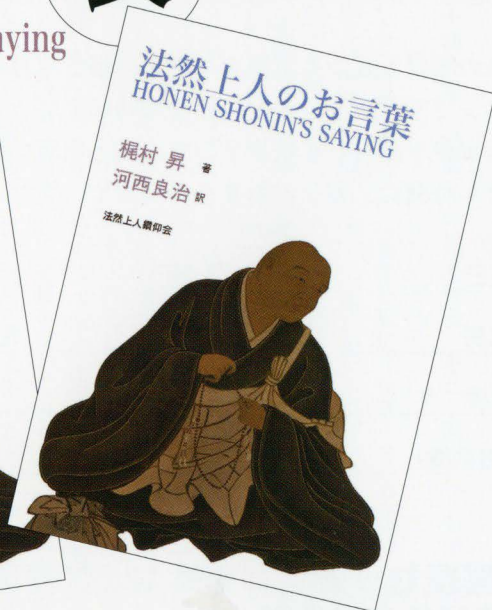
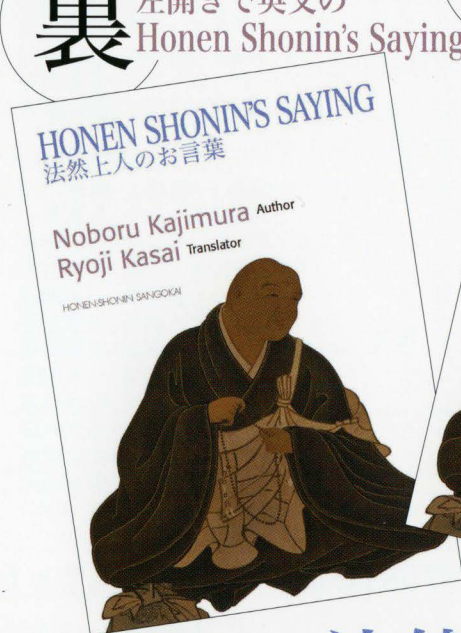
月刊浄土の連載が 単行本になりました。

裏

左開きで英文の
Honen Shonin's Saying

表

右開きで和文の
ご法語



和英対応法然上人のお言葉

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。
外国の方のお土産にも最適です。

A5判・124ページ 頒価 1,000円(税別)

法然上人鑽仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。